

— 「あのときかもしれない」長田弘 —

「遠くへ行ってはいけないよ。」

子供のきみは遊びに行くとき、いつもそう言われた。いつも同じその言葉だった。だれもがきみにそう言った。きみにそう言わなかったのは、きみだけだ。

「遠く」というのは、きみには魔法のかかった言葉のようなものだった。きみには行ってはいけない所があり、それが、「遠く」と呼ばれる所なのだ。そこへ行ってはならない。そう言われれば言われるほど、きみは「遠く」という所へ一度行きたくてたまらなくなった。



「遠く」というのがいったいどこにあるのか、きみは知らなかった。きみの街のどこかに、それはあるのだろうか。きみはきみの街ならどこでも、きみの手のひらのように詳しく知っていた。しかし、きみの知識をありったけ集めても、やっぱりどんな「遠く」もきみの街にはなかったのだ。きみの街には隠された、秘密の「遠く」なんて所はなかった。「遠く」とはきみの街の外にある所なのだ。〈中略〉

「遠くへ行ってはいけないよ。」

子供だった自分を思い出すとき、きみがいつも真っ先に思い出すのは、その言葉だ。子供のきみは「遠く」へ行くことを夢見た子供だった。だが、そのときのきみはまだ、「遠く」というのが、そこまで行ったら、もう引き返せない所なんだということを知らなかった。

「遠く」というのは、行くことはできても、もどることのできない所だ。大人のきみは、そのことを知っている。大人のきみは、子供のきみにもう二度ともどれないほど、遠くまで来てしまったからだ。

子供のきみは、ある日ふと、もうだれからも「遠くへ行ってはいけないよ。」と言われなくなったことに気づく。そのときだったんだ。そのとき、きみはもう、一人の子供じゃなくて、一人の大人になってたんだ。

長田弘さんの詩「あのときかもしれない」の一部です。

5月17日の野外教室（5年）を最後に、春の校外学習行事が終わりました。1年生は森公園、2年生は文化の杜、3年生は清洲城、4年生は名古屋城、5年生は旭高原、6年生は京都奈良。学年が上がるにつれて、より遠くへ出かけました。3年生以上は1人では行けないほど“遠く”です。でも、少しずつ遠くへ、自分の足で歩いて、自転車に乗って、電車に乗って出かけることができるようになったとき、「遠くへ行ってはいけないよ」といわれない大人になったことに気づきます。正則の子は春の行事で、少しだけ遠くへ行って、少しだけ大人になりました。何かと物騒な報道が続いています。大人になっても「気をつけてね」の声がけは続けていきたいものですね。

